

物語行為を促進する読みの学習指導の研究

【作家になる体験】を通じて

学籍番号 229306
氏名 澤田 裕典
主指導教員 住田 勝
副指導教員 成實 朋子

1. 問題の所在

改訂された学習指導要領の眼目である「主体的・対話的で深い学び」という三つの学び、とりわけ「深い学び」については、国語科でこそ、耕される教科固有のものの見方考え方との関係で、これまで様々な議論が積み重ねられてきた。本実践研究は、文学の読みにおいて、学習者を物語を語りなす行為者の立ち位置に立たせることが、国語科固有のものの見方考え方と「言語による社会参加」の実現に寄与すると考え、そうした「物語行為」の意識化を促す学習指導を構想し、読者反応の分析を通して、その意義を検証することを目的とする。

2. 物語行為者になるための「作家になる」学習指導

そもそも「物語る」ということは様々な経験や認知、知識を絡め合わせ自分自身の過去を過去から現在の変容の中で意図的に意味づけする行為であり、私たち人間の基本的な思考様式である。基本的な思考形式である「物語行為」＝「語り」へはどのようにアプローチしたらよいのだろうか。本実践研究では山元(2014)の「要点駆動」、住田(2015. 2016. 2020)の「読書能力の構造モデル」「対話的な学びの構造：二つのネットワーク」、西郷竹彦の「視点論」などを中心に据えて一つに三浦哲郎の「とんかつ」を用いた続き物語を書く活動(以下、「続き物語活動」)を発展課題実習Ⅰで行い、二つに武田綾乃の「側転と三夏」を用いた視点の転換を起爆剤としたリメイク活動(以下、「リメイク活動」)を発展課題実習Ⅱで試みた。

3. 「続き物語」から見た学習者の実態と課題

大阪府立0高等学校の1年生を対象に三浦哲郎の「とんかつ」を用いて実践をおこなった。

続き物語活動は住田(2015. 2016)の「読書能力の構造モデル」における二つの読みを循環し視点、立場の変化の中で本文テキストを読み住田(2020)の「対話的な学びの構造：二つのネットワーク」における「図書館」のネットワークとして「キャラクター像」と本文を読んだ感想などを組織した。そして、「書くこと」を通じて仲間に、社会に共有する「広場」のネットワークを意識した活動になることを期待した。しかし、「図書館」のネットワークは具体的な活動として組織できたが、「広場」のネットワークが具体的な形をとって学習者の前に組織できず、「広場」のネットワークを意識した「書くこと」の活動としては不十分であった。今後は「明

確なキャラクター像」を分析、解釈し学習者の中でその視点を確保するという具体的な活動を「広場」のネットワークと設定、重点を置き、また、物語言説の活用やその作為性を「図書館」のネットワークとして組織し、二つのネットワークそれぞれに具体的な活動を割り当て学習者がそれらのネットワークを確実に享受できるようにする。

4. 物語行為を促進する「視点の転換」に着目した学習指導

大阪府立0高等学校の1年生を対象に武田綾乃の「側転と三夏」を用いて実践をおこなった。四つの成果物の分析から、リメイク活動が西郷竹彦の「視点論」を中心とした仮説に沿って、同化と異化の循環の中で行われていることが分かった。読者であった学習者が妹：真綾の内情を知ったうえで、姉：咲綾の視点に転換するリメイク活動は語り手として物語行為者の立場に立つとき、本文構造「見て」→「会話して」→「思う」の構造を意識した結果、学習者の語り手の視点である「外の目」は咲綾の「内の目」に「後の目」としておかれ、学習者は真綾の内面を知った読者から語り手になり、真綾の内情を知らない咲綾の視点との間で板挟みになる。板挟みになることで描写の選択が行われ、この行為は物語行為者としての行為そのものと言える。

「視点の転換」を軸としたリメイク活動は発展課題実習Ⅰと異なり、具体的な活動を「広場」「図書館」の二つのネットワークに当てはめた。「なること/みること」の読みを「明確なキャラクター像」という焦点で「広場」のネットワークとして具体的に組織し、「物語行為」への読みに移行させる仕掛けとして「視点の転換」を用いて視点の転換の中で、学習者の立場の循環、視点の転換が行われ、本文構造という「図書館」のネットワークも介し、物語行為者としての行為を成すに到った。そして、その先に「続き物語活動」の様に自ら「個人的な解釈」を「広場」のネットワーク、社会に開示していくという物語行為が成された。

5. 本実践研究の成果と課題

「作家になる体験」は物語行為者の立場に読者である学習者を誘う仕掛けとして機能した。住田(2020)の「対話的な学びの構造：二つのネットワーク」のネットワークを学習指導の中で具体的な活動として組織し、学習者が物語行為者となり「書くこと」で住田(2015, 2016)の「読書能力の構造モデル」の二つの「読むこと」を繋ぎ、循環させる仕掛けとして機能し学習者を「作家」つまり物語行為者に到らせた。さらには、具体的な二つのネットワークを介した「作家になる体験」の学習指導の先に学習者が自ら「広場」にいる仲間、社会を意識した「個人的な解釈」の社会への開示という「言語による社会参加」の姿が見られた。

また、「作家になる体験」は「言葉による見方・考え方」を働かせる学習であり、読みを深めるアプローチであるとも明らかになった。

今後は、具体的な二つのネットワークにあたる活動はどのような注意点、共通点があるのか教材に合わせて、二つのネットワークの活動を組織しながら検証を続けていきたい。また、「図書館」のネットワークにおいて学習者個人が今までどのような読書体験、人生、経験などを経てどのような判断基準を持っているのか、学習者の過去の蓄積である「図書館」を系統的に分析することで二つのネットワークの活動を組織する時の一つの指針になるのではないかと思う。授業実践における発問や手立てなどについても多くの課題が残っている。今後も「作家になる体験」による学習指導をより具体的に模索していきたい。